

# 【翻刻】『類題稻葉集』冬部

\*\*\*渡邊 健

## 概要

【翻刻】『類題稻葉集』序・春部（『米子工業高等専門学校研究報告』第五六号、令和三年三月）、【翻刻】『類題稻葉集』夏部（同第五七号、令和四年三月）、【翻刻】『類題稻葉集』秋部（同第五八号、令和五年三月）に引き続き、『類題稻葉集』冬部二八八首を翻刻・紹介する。本書には近世の鳥取の歌人の和歌が広く収められており、幕末の鳥取における地方歌壇の活動を知る上で有益な資料である。

凡例

- 一 底本には、米子市立図書館所蔵『稻葉和歌集』上巻（整理番号 Y91・I27・1）を用いた。
  - 二 翻刻に当たっては、原文の表記を尊重したが、最小限次のような処置を行った。
    - 1 歌頭に算用数字で和歌の通し番号を付した。
    - 2 読解の便宜を考慮して語の清濁や漢字の送り仮名を改めた。送り仮名を補った場合は、その仮名に傍点を付した（例 原文「立そむる」↓翻刻本文「立ちそむる」）。
    - 3 仮名の表記は現行の字体により、「ハ・ニ・ミ・ノ」等の片仮名表記も平仮名に改めた。また、歴史的仮名遣いと違うところは原文のままとし、「(ママ)」と傍記した。
    - 4 漢字の表記は、原則として通行の字体によった（俗字や略字は原則として用いない）。ただし、旧字・異体字などを部分的に残す（「嶋・浪・湊」などはそのままとする）。指示語や助詞・助動詞などの漢字もそのまま残した（「此」「哉」「也」など）。
    - 5 読みが難しいものに限って、最小限、漢字または漢語句の右傍に（）を付し、平仮名で読みを施した。
    - 6 繰り返し記号「ゝ」「く」は原文のままとしたが、濁音はそれぞれ「ゞ」「ぐ」で表記した。
    - 7 合字「ふ」「を」は、それぞれ「こと」「より」に改めた。
    - 8 翻刻の都合上、題・詞書は底本の記載形式に関わらず、和歌より二字下げとした。序文や詞書等の文章には句読点・鉤括弧等を付し、改行は私意で改めた。
    - 9 不審な箇所には「ママ」と傍記し、読解困難な箇所は「■」で表記した。底本の誤脱と思われる箇所については、稿末の【翻刻付記】に私見による改訂案をまとめて記している。
    - 10 丁付は、各丁片面の終わりに「」を付し、その下の括弧内に丁数と表裏（オ・ウ）を記した。
    - 三 本稿を成すにあたり、貴重資料の閲覧、翻刻の掲載をご許可いただいた米子市立図書館に感謝申し上げます。
- なお本稿は、科学研究費補助金（基盤研究(C)）「近世後期の鳥取の和歌に関する資料調査と総合的研究」（課題番号 20K00359 代表・渡邊健）、山陰研究プロジェクト「山陰の文学・歴史関係資料の基礎的調査研究と発信・公開に関するプロジェクト」（二〇二二～二〇二四年度、代表・田

中則雄)による研究成果の一部である。

【翻刻 『類題稻葉集』 冬部

冬部

初冬

- 1231 芦火たく難波の浦の朝煙さやかに見えて冬は来にけり 洪園  
 1232 日影さす軒の朝霜うちけぶり春めく空に冬はきにけり 治堅  
 1233 遠近に曉告ぐる鐘の音のさゆるや冬の始めなるらん 有信  
 1234 はじめみぢ一葉二葉と散りそめて月もるかたに冬はみえけり 周道  
 1235 明けやらでつれなき闇のひまよりも風寒き冬はきにけり 清男  
 1236 咲き残るまがきの菊も色かへて朝霜ふかし冬やきぬらん 知彰  
 1237 をぐら山きのふのまゝの紅葉を秋のかたみとけふよりは見ん 本龍  
 1238 笹のはに置く霜見えて朝な／＼日影またるゝ冬はきにけり 尚義  
 初冬雲  
 1239 神無月たつや時雨もいそぐらんあしとき雲の山めぐりする 有信  
 初冬時雨  
 1240 わが門の松はきのふの色ながら心をそむる初しぐれかな 義継  
 1241 こ鳥なく朝の日影それながら有りなし雲や時雨そめける 年足  
 田家初冬  
 1242 刈りはてし門田のくろの朝霜に日影けぶりて冬はきにけり 周道  
 1243 枯れのこるをだの僧都のみの笠に時雨うちして冬は来にけり 宣雄  
 山家初冬  
 1244 薄霧に秋をかこひしさゝ垣の朝霜寒し冬や来ぬらん 松原中和  
 時雨

1245 定めなき空にも有るかな晴れぬとて朝戸やるまに打ちしぐれつ

広滋

1246 山かぜのさそへばきほふ浮雲の行逢の空や打ちしぐるらん

渡辺瑜

1247 しぐれの雨今降りくらし鷺嶺の楨たつ奥は雲にかくせり

義雄

1248 雲きほふ天のかぐ山うねび山争ひがほにふるしぐれかな

秀興

1249 をりふしに心をよせてながむればしぐるゝ空もおもしろきかな

治堅

1250 大神は雪より明けてぬば玉の夜見の松原しぐれふるなり

重好

時雨早過

1251 夢さそふ時雨はよそに降り過ぎて軒の傘ぞ枕をばとふ

錫光

一(六一ウ)

1252 置くしもの花よりしらむ明けぼのを雲になして行く時雨かな 将貫

暁時雨

1253 老いらくのね覚めわびしき柴のとを音づれがほにふるしぐれ哉

妙専

1254 ひとそゝきしぐれし月は夢ならで晴るる軒ばの暁の露

野間長世

朝時雨

1255 むら雀ねぐらはなるゝ朝妻のかた山林時雨ふるなり

周道

1256 山ばたのそばの立木にさる鳴きて朝戸出寒き村しぐれ哉

喜蔭

夕時雨

1257 かぜわたる空に夕日の影ちりて松原遠く時雨ふる也

祐之

1258 中空を雲の一むら行く見えて夕日まばらに降る時雨かな

英光

夜時雨

1259 袖ぬらすよはのしぐれのいくかへりはては心もうちしめりつゝ

守雄

- 月前時雨
- 1260 晴れくもり月も里わくひまやなきしぐれて更くる在明の空 純徳
- 1261 さだめなくしぐるゝ空のひまとめて見んと思ひし月かたぶきぬ 茂雄
- 1262 松風に別るゝ雲の絶えまよりしぐれて出づる山のはの月  
「(六二才)
- 1263 かぜ早みもみぢ乱るゝ山のはに月をのこして降るしぐれ哉 保信
- 岡時雨
- 1264 さそひこしよもの嵐を我が岡の松に残して行くしぐれかな 一魚
- 野時雨
- 1265 染めのこす山の木の葉のなればや枯野にのみもうちしぐるらん 淇園
- 1266 むさしのや草葉にすがる有明の月のうへにも降るしぐれかな 惟成
- 関時雨
- 1267 神無月おくれ先だつうき雲に時雨もとめぬ足がらの関 仲子
- 羈中時雨
- 1268 草枕明日のしぐれの晴れなばと思ふや旅の心なるらん 淇園
- 田家時雨
- 1269 を山だの落穂ひろひて帰るさの子らが袂に時雨ふる也 信子
- 1270 をしねほすかど田のはてをさかひにて伏せやもとはぬ村しぐれ哉 喜蔭
- 海辺時雨
- 1271 芦鶴の島めぐりする声すなりうらみやまなく時雨ふるらん 安歎
- 閑居時雨
- 1272 うつろはぬきのふの秋もながめしを朽葉にそゞぐ夕時雨かな 弘範
- 1273 ひとりすむかた山窓に音づれて淋しさそふる村しぐれかな 仲子
- 1274 世にうとき我が柴の戸をしぼくも此のころとふは時雨也けり  
「(六二ウ)
- 山家時雨
- 1275 一むらの雲をさそひて吹くかぜにやがてしぐるゝ山もとの里 誠胤
- 故郷時雨
- 1276 わが袖にしぐるゝみれば故郷のかぜの心はかはらざりけり 知足
- ある朝
- 1277 神な月よたゞしぐれし雨雲の行くへも見えぬ朝朗かな 穰
- ある夕
- 1278 かきくもり今はと見えて降り来ぬも猶さだめなき村しぐれかな 武彦
- 落葉
- 1279 こがれつる心の色やたぐふらんもみちに成りぬ山をろしの風 祐之
- 1280 うなゐ子が椎の実ひろふ袖の上にけふもしぐれて散るもみぢかな 豊秋
- 1281 はじめみぢ一葉ふたはとこぼれけり夕霜しろき白菊の上に 千恵子
- 1282 あかず思ふ梢のもみぢ雨とふり風になびきていづち行くらん いく子
- 1283 しとゞ鳴く庭の朝霜うちけぶり薄き日影に散るもみぢかな 寿子
- 1284 吹くほどはよそにさそひて木枯のたゆめば庭にちるもみぢかな 英庸
- 1285 かみな月春めく空の朝風におぼつかなくもちる紅葉かな  
「(六三才)
- 落葉不待風
- 1286 おのづから散ればちるなる紅葉にけふまで風を恨みつるかな 本龍

1298 しとゞなく柴の垣ほに霜見えて朝戸出寒し岡のべの庵 俊民  
 1297 起きいだしみやる外面の朝月夜うするゝかたに霜ぞ知らるゝ 賤子  
 1296 吹きたゆむあらしの後のをざゝ垣ふしめに成りて霜さやぐ也 治堅  
 霜  
 1295 我が庵は峯の嵐に村雲の晴れぬと思へば木の葉ちる也 陳修  
 一(六三ウ)  
 1294 さればこそ落葉をいそぐ名なりけれ音すさまじき木枯の杜 弘範  
 杜落葉  
 1293 山かぜも吹きしづまれど朝ぼらけそこともなしに散る木の葉かな 淇園  
 朝落葉  
 1292 中／＼にあらしはまなく音づれて落葉に絶ゆる庵のかよひ路 覚応寺文英  
 1291 霜の色に秋を見はてし我が門の苔路てらして散る木の葉かな 義信  
 閑中落葉  
 1290 山寺のふるきいはほの苔ぎぬにしきおりかくこがらしの風 信睦  
 古寺落葉  
 1289 村しぐれ晴れ行くあとの山かぜを色になしてもふる木の葉かな 守雄  
 雨後落葉  
 1288 山陰やかはらぬ池のこゝろさへもみぢの色にうつる頃かな 中本高德  
 1287 旅人のしぐれにかざす袖笠をにしきになすはもみぢ也けり 豊秋  
 落葉混雨  
 落葉浮水

1315 蟬の声とよみし松をうごかして木がらしきほふ夕ぐれの空 常之  
 1314 雪さそふ風は冬田に吹きくれて月に乱るゝ雁の声かな 重明  
 木枯  
 1313 かれ残る一もと菊に霜ふりて二たびをしき秋の色かな 千代女  
 冬雁  
 1312 おく霜をいたゞくにはのませ垣に翁さびても残る菊かな 有信  
 1311 秋の色は露も残らぬ朝霜の花にまじりてかをる菊かな 清彦  
 1310 袖の雪はらはんかげと立ちよれば松のしづくはみぞれ也けり 惟成  
 残菊  
 1309 とぶ鷺のねぐらの森の松のはに霜もみだれて吹く嵐かな 季尚  
 寒松  
 1308 鳩どりのかづく入江のかれ柳霜のさ枝に嵐ふくなり 治堅  
 1307 今はやまねく袂も霜とちて冬野のを花とふ人もなし 英庸  
 寒樹  
 1306 明日はまた雪やうづめん霜消えてしばし春めく庭のかげ草 季世子  
 一(六四オ)  
 1305 もえ出でん春のおもひはねにこめてかれ行く草に霜けぶる也 周道  
 1304 あらしふく竹の葉ごしの影よわみ夕日ながらに霜ぐもりつゝ 治堅  
 寒草  
 1303 いつしかと玉のをざゝに見し露もよをへて霜と結ぼゝれつゝ 有恒  
 竹霜  
 1302 松かぜのたゆむかたより暮れ初めて岡辺のさゝ生霜さやぐ也 有看  
 篠霜  
 1301 ちどりなく川辺のちはらうら枯れて明けぼの清き霜の色かな 豊広  
 夕霜  
 1300 霜とくる風に朝日の影ぬれてをだのあぜ道うち煙りつゝ 知足  
 1299 月残るあらしの末の朝ぐもり枯野の霜や置きあまるらん 宏年

- 1316 もみぢ葉は色も残らぬ山の端の月にふくなり木がらしの風 祐之
- 1317 さむしろにかたしく袖も身にそはでね覚めがちな木がらしの風 義孝
- 1318 のがれこしわが山陰も秋過ぎて猶よの中の木がらしぞ吹く 衡  
「(六四ウ)
- 1319 夜もすがら吹きもたゆまぬ木枯にしげるは星のはやし也けり 潮  
枯野
- 1320 ものゝふの矢田のゝ原もかれにけりいづこに鹿のかけかくるらん 豊秋
- 1321 朝露にきほひし草もうら枯れて夕霜寒く野は成りにけり 貞喜  
帰花
- 1322 春を待つ下の心もあらはれて一花さける山ざくらかな 寛蔭  
氷
- 1323 えぞがしま北の波路はいかならん硯の海ぞ今朝氷りぬる 弘範
- 1324 をとめらが水もてはこぶ玉まりの雫も氷る朝朗かな 賤子
- 1325 川氷  
早せ川早きせ波も此の頃は氷にこめて音たゆみつゝ 千恵子  
井氷
- 1326 走井も氷りはてたる朝ぼらけあらしのみこそ吹きわたりけれ 豊秋  
田氷
- 1327 有明の消え行くかげにみわたせばさゆる田面は氷也けり 秀平  
池氷
- 1328 霜がれの芦の葉かげを立つかりのあとより氷る大沢の池 季尚  
湖氷  
「(六五オ)
- 1329 鳩の海や氷る朝けにみわたせば波には遠し唐崎の松 安歎  
閑処氷
- 1330 松杉に音はゆづりてさゞれ水落葉の底に氷る頃かな 重尚  
冬月
- 1331 さえくれし一むら吹雪かつ晴れて軒端にすがる有明の月 守雄
- 1332 かれ柳あらはに見えて目なれつる窓さへすぎ冬の夜の月 里餘子
- 1333 むら雲はとまらぬ空にふく風の音のみ高し冬の夜の月 仲子  
冬暁月
- 1334 霜こほる岡辺の松に明け残る片われ月の影の寒けさ 隆磨  
田冬月
- 1335 山がたのをだのしゝ垣霜見えて有明の月に狐なくなり 保信  
河冬月
- 1336 大空はあらしに晴れて山川の岩せに氷る月の影かな 清村  
泊冬月
- 1337 ひとりなく霜夜の月をかたしきてねられん物か浪の枕に 治堅  
寒山月
- 1338 山のはに雲の衣をかけ置きて影寒げにもぼる月かな 則行  
樹間冬月
- 1339 あらし吹く梢のしばに照らしけりもみぢの後の有明の月 ちせ子  
海辺冬月  
「(六五ウ)
- 1340 をりくは霜ぐもりして吹上の松かぜながら月ぞさえゆく 英庸  
千鳥
- 1341 芦の葉に霜見えそめし夕より入江のちどり鳴かぬよもなし 祐之
- 1342 楸ちる川かぜ見えて夕月の行くへにきゆる村千鳥かな 知足
- 1343 沖つ波よるのうら風寒ければ八十島がくれちどりなく也 宏年
- 1344 玉藻かるいらこが崎の夕浪に立ちみだれても鳴く千どりかな 安歎
- 1345 在りかよひ常にもがもな気多の崎夕浪ちどり鳴く音かなしも 正実

- 1362 1361 1360 1359 1358 1357 1356 1355 1354 1353 1352 1351 1350 1349 1348 1347 1346
- あかし潟沖の帆かげもくれはてゝせとの波まにちどりなく也 茂孝  
 夜舟こぐ梶の音絶えて松風の吹上のちどり月に鳴くなり 潮  
 かも川のせ波いさよふ夜嵐にたゞよひ兼ねて鳴く千鳥かな 俊民  
 君しまや室のとまりのさよちどりうきねの夢をとひがほにして 弘範  
 波の音の高浜おろし小夜更けてかるの浦わにちどりなく也 周道  
 み雪ちる千代の河原の風をいたみ松原たどる夕千鳥かな 陳修  
 米子よりかへるさ赤崎にて 〔六六才〕  
 穢まくらねられぬまゝにをちかへり鳴くかちどりも友なしにして 年平  
 水鳥  
 乱れ芦のかれず友なふ水とりはうきたる中と見えずも有るかな 安歎  
 舟きほふ難波堀江のみなれ棹なれて放るゝ水鳥もなし 久鎮  
 はらひ侘び羽きるをしの剣羽に霜よの月も影くだけつゝ 治堅  
 湊江の玉もの床にふす鴨のはぶきもしげし霜や置くらん 秀子  
 大井川くだす筏の早きせに立ちおくれたる水鳥の声 周道  
 霜月ばかり千代川のほとりを過ぎて  
 筏士のを笠のうへに雪みえてしぐれ寒けき川づらの里 俊彦  
 霰  
 かきくらす雲の絶えまに照る月の光をちらす玉霰かな 保合  
 〔六六ウ〕  
 薄墨に空かきくらし行く雲のその色となく降るあられかな 知運  
 くれいそぐ夕山寺の鐘の音も袖にくだけてふる霰かな 知足  
 玉あられみだれちる夜は手枕の夢もさながら結び兼ねつゝ 里餘子
- 1376 1375 1374 1373 1372 1371 1370 1369 1368 1367 1366 1365 1364 1363
- 雲はれし外山の松のしげみより風にこぼるゝ玉霰かな 千世子  
 暁霰  
 ばせをばにまたも音してわが夢の破れし跡をとふ霰かな 弘範  
 尾上霰  
 うち散るも音静かにて槇のやの苔むすほどは霰にぞしる 正甫  
 荒屋霰  
 今朝みれば落葉が上の初霰ふるやの庭に玉ぞかざれる 有秋  
 行路霰  
 あらし吹くつゝみの長手朝行けばさゞれにまじる玉霰かな 宏年  
 閨霰  
 柴のとをたゝくや誰とさよ枕まきかへきけばあられふる也 中村柳齋  
 袞  
 夏刈の麻手をぶすま引きかづきぬるよも寒き風の音かな 治堅  
 しらぬひのつくしの綿の厚ぶすまあやにもかへすたのむよはかな 茂之  
 〔六七才〕  
 とりくゝにとりかさねてもおのづからひとりふすまは寒けかりけり 道阿  
 網代  
 おほくらの入江なる也宇治人のあじろの簀子いかにさゆらん 治堅  
 をし鳥の群れある数か朝霧の絶えまにみゆるせゞのあじろ木 広滋  
 かゞりたく火影ほのかにさよ更けてあじろに氷るうぢの川浪 豊平  
 雪  
 月花のあかぬながめもさながらに思ひけたるゝ雪の曙  
 さえくれしかぜのと絶えに終夜つもらん底の雪をしるかな 秀臣  
 よみ人しらず

1392 朝鳥ねぐらはなれし跡なれやかたへ散りたる松のしら雪 治堅  
 ─ (六八才)

1391 ちらすべきかぜも知りたる明けぼのゝ木ごとの花の雪の静けさ 高德

1390 わが岡のをかみもしらぬ遠山の雪はあらしやふらせ初めけん 潮  
 曙雪

1389 咲きまじる花とも見えで紅葉の残る梢に初雪ぞふる 千代女  
 遠山初雪

1388 降りそむる梢のみ雪やよしばしきえでもあれな花とみるべく 是海

1387 さゞきなく杉生の垣のうへにのみさだかに残る初み雪かな 武彦

1386 朝日さす松はみどりにかへりけりはかなの雪や雫のみして 祐之

1385 うなみ子がつくれる山のかひもなく雫をいそぐ庭の初雪 守雄  
 初雪

1384 きのでふくもるは雪と待たれしを又も時雨の雨こぼれきぬ 千恵子

1383 タづく日霜にうすれてさえぬ也朝の床に雪やきかまし 祐之  
 待雪

1382 朝風に散りて匂はぬ花ながら梢の雪のあかずも有るかな 秀年

1381 冬がれの梢に雪の花さけば人もや来んと朝なく待つ 石井正順  
 ─ (六七ウ)

1380 きのでふかも紅葉かさしゝ秋篠や外山の松も雪に成りつゝ 潮

1379 いざ子どもすだれとくまけ沓もてこ初雪ふれり山つくるまで 知良

1378 こゝろしてねぐらはなれよ朝鳥羽ぶかば松の雪や散りなん 賤子

1377 朝ぼらけ峯とびこえし白鷺の行くへに似たる松の雪かな 茂之

1407 矢橋舟追風寒く成りにけり比良の吹雪やつみて帰らん 海辺雪  
 (なばせ)

1406 山人のかよひし道はと絶えして雪をぞわたす谷のかけはし 季尚  
 湖上雪

1405 かは風はをさゝに落ちて水鳥の声よりくるゝ雪の空かな 守雄  
 橋上雪

1404 また更につゝみの桜咲きかへり雪の花ふくすだの川風 祐之

1403 心あての黒木の橋も埋もれて吹雪にまよふ谷の細道 季尚  
 ─ (六八ウ)

1402 高砂の尾上の嵐うちくもり松より北は雪に成りにき 宏年  
 谷雪

1401 塵ばかり闇を残せるかげもなし竹のは山の雪の曙 寛蔭

1400 きのでふかも風待つ空にあふぎみし扇の嶺は雪ふりにけり 安歎

1399 はてもなく散りかふ雪は山松にくだけし風の姿なりけり 重矩  
 山雪

1398 浮雲のかげさへ見えさふる雪にかぜのすがたは顕はれにけり 重好

1397 軒の松籬の竹の雪しづれをりゝよはの夢覚ましつゝ 知運  
 風前雪

1396 人しれず竹にも木にも花咲きてよこそ雪は盛りなりけれ 淇園

1395 とひなれし鳥の声だにたゆる日の雪のひまもる入逢の鐘 景山龍  
 夜雪

1394 うちわたすいさゝ竹原しもと原みながら花の雪の曙 賤子

1393 水鳥のさわぐかたより明けそめて芦のかれ葉に雪ぞかゝれる 茂孝

- 1408 ちどりなく浦洲の雪の光のみ波の行くへにくれ残りつゝ 茂信
- 1409 とまり鶉のねぐら争ふ声さえて礧山松につもる雪かな 糸子
- 1410 うち寄する波のくだけと見るばかり礧の巖に初雪ぞ降る 俊彦
- 1411 見わたせば蟹のとまやも埋もれて雪にはてなき浦の淋しさ 恒安
- 1412 雪ふかみふりぬる駒をすゝめても猶分けまよふ足がらの閑 小泉栄隆
- 野雪
- 1413 もとかしはもと来し道も埋もれぬふるからをのゝ雪の夕ぐれ 武義
- 1414 かくれたるをやもあらはに成りにけり雪にをれふす野べの竹村 信甫
- 籬雪
- 1415 けぬが上に明日さへふらば埋もれしまがきや雪の山と成りなん 里餘子
- 庭雪
- 1416 雪ふれば庭のをしへもみだれけりつかさの松も枝たわみつゝ 信甫
- 都雪
- 1417 あたひなき花の都の朝ぼらけ盛りみじかく消ゆる雪かな 季尚
- 里雪
- 1418 鶉だに声をばさてもとふべきを雪のいづこか深草の里 宏年
- 山家雪
- 1419 今よりは友をもまたじ我が山は松さへ雪にうづもれにけり 柳齋
- 閑居雪
- 1420 さびしさを心とすめる宿なれば雪のつもるぞうれしかりける 読人しらす
- 冬籠もりならべし庵の窓を明けてとはゞやけさの雪のけしきを
- 1422 冬がれの梢の花と見る雪は散りかゝるをや咲くといふらん 信睦
- 1423 すさまじきよはの嵐のうらうへにけさおもしろき木ゝの白雪 しず子
- 樹上雪
- 1424 枝ごとの花ともみえて降る雪に松もさくらの春やけつらん 貞喜
- 1425 夕まぐれそれかあらぬか時とふ鷺坂山の松のしら雪 守前
- 松雪
- 1426 吹きはらふ風はと絶えて松がえの力をみする今朝の雪かな 西村千代蔭
- 1427 あらそはで降りつむ雪にふす竹のよわきや強きねざしならまし 祐之
- 竹雪
- 1428 をれふすもなびくも竹のさまゞにふし有りげなる雪の曙 周道
- 1429 益荒男のさつ夫とならんよ竹も弓とたわみて雪降りにけり 守前
- 1430 風すさぶ窓の竹むら末はれて雪のひまもる月もみえけり 宣雄
- 名所雪
- 1431 吉野山花の春こそまたれしか思ひもかけぬ雪の明けぼの 弘範
- 馬上見雪
- 1432 駒とめて大神山をみさくれば雲よりうへに雪ぞつもれる 香
- 鳥翅松雪
- 1433 ものげなく雪をちらしておのが羽の色をも恥ぢぬ山鳥かな 英庸
- 十二月ばかり雪いと高くつもりけるに
- 1434 思ひつるあらましごと埋もれぬ心の外の雪の山ごえ 安歎
- 若かりしほど雪降りける夜、宜門がとぶらひきて何くれと
- 「(七〇才)

1448 くる春は待たずしもあらず埋火に消えをあらそふ我がみなれども

1447 わすれてはありし我が身のむかしさへかきおこさるゝ闇のうづみ火  
淇園

1446 きりくす鳴くよりよわきかまの音に霜と消え行くよはの埋火  
古樹

1445 冬ながら心に花のさくら炭匂ふ火桶のむつまじきかな  
賤子

1444 夜もすがら消えぬばかりをたのみにて霜をぞはらふ闇の埋火  
貞喜

1443 月雪も見らく少なき老いらくのこふらく多き闇の埋火  
政喜

1442 埋火  
一(七〇ウ)

1441 野行幸  
英庸

1440 あり鷹のつかれを時と飛び立ちて夕月の影もちるまでふく嵐かな  
重尚

1439 手放せば雲によこぎるあら鷹の羽風かきくらし霰ふる也  
重明

1438 鳥さけびに落ちくる鷹の鈴の音もこぼれて寒き雪の上かな  
鎮喜

1437 狩りくらし翅やすむるはし鷹のと山の松に月も出でにけり  
三蔭

1436 手放しししらふの鷹やかへるらん雪に音するすゞのしの原  
久鎮

1435 鷹狩  
四宮直嗣

ふりし世は夢といくらもかはらねど雪の遊びの跡ぞ消えせぬ

けうじ遊びける後、年経て江戸に在りける頃、久しく音づれざりければ、「今はたゞ跡さへ夢と消えつらんふりにし雪の音づれもなし」とよみておこせけるかへしに

1465 世を早み岩にせかれて越す波のたるみも氷る冬の山川  
利貞

1464 木にもあらず竹にもあらぬ冬川の氷のいかだよどみがちなる  
有信

1463 ともすれば筆の林にかぜさえて硯の海もこほるよはかな  
言幸

1462 冬夜  
一(七一ウ)

1461 かのみゆるあら野の末の小松原霜うちけぶり朝日さす也  
周道

1460 うすれ行く月影ながらさゝのはにおく霜白し夜は明けぬらし  
一魚

1459 冬暁  
浄阿

1458 朝日さす梢の雪の花ちりて残るしづくぞ梅がゝはする  
俊彦

1457 冬籠もり思ひもかけぬ吾妻屋の軒の一本の梅咲きにけり  
貞宣

1456 たれこめし窓のをかめの梅の花かぜだにしらぬかに薫りつゝ  
寛隆

1455 かをらずは花ともえやはしら雪のいつの人まに梅咲きぬらん  
香

1454 冬籠もり雪のふるえに咲く梅の花もや花の春を待つらん  
武成

1453 大君のめぐみかしこきつくしわた朽木の花にかづくよはかな  
治堅

1452 早梅  
一(七一オ)

いつしかと御前のかぐり影消えて雲ゐにさゆる赤星の声  
季尚

1451 神楽  
茂之

1450 君が世は山の奥なる炭がまの煙さへこそにぎはひにけれ  
武彦

1449 やく炭は桜なるらしをの山の枯生の嵐うす霞せり  
宏年

すみがまの煙なびきて松風の色にくれ行く大はらの里  
茂之

炭竈

- 1478 1477 1476 1475 1474 1473 1472 1471 1470 1469 1468 1467 1466
- 1491 1490 1489 1488 1487 1486 1485 1484 1483 1482 1481 1480 1479
- 冬獣  
霜のうへに残るもあはれ今さかん梅の木かげのなでしこの花  
隆麿
- 霰うつ園生の竹の葉がくれにしら玉椿花咲きにけり  
周道
- 冬花  
散りはてしきくらが枝に木がらしは吹きたゆめども寒き空かな  
知雄
- 冬木  
草に木に竹結びそへていつしかと雪待つ庭は見る色もなし  
寛蔭
- 冬庭  
かやくきの声待ちとりて朝な／＼松の落葉をひろふ頃かな  
治堅  
「(七二才)」
- 冬閑居  
山ざとの窓のさゝ生の霜ぐもり月も朧にさゆる頃哉  
縁
- 冬山家  
落稚をかれ生にひろふ山猿の跡こそみゆれ庭の朝霜  
弘範
- 冬山家  
かせすさぶ田面の末に里みえてけぶりも寒き雪のうへかな  
豊平
- 冬田家  
槇のたつあら山つゞき冬がれて嵐に残る滝の音かな  
喜蔭
- 冬滝  
霜けふる朝の日影のどかにてかれ野の原にふく風もなし  
縁
- 冬野  
さびしさのはてこそみゆれ月さえてさはる隈なき冬枯れの山  
村岡
- 冬山  
音たてし岩せもよどむ水の上を氷らで行くは嵐なりけり  
宜行
- 冬風  
かげみれば我が黒かみにふる雪の色さへ寒いさらみの水  
清彦
- 夕まぐれ遠かた人の松の火も見えぬ冬野に狐なく也  
義孝
- 冬鐘  
老いぬればね覚めがちなる冬の夜に待つもま遠のあかつきの鐘  
良任
- 冬船  
大ふねのまかぢぬきおろす音寒し横ぎる風や雪に成るらん  
知足
- 冬述懐  
窓たゞく嵐もしらで埋火にとはずがたりのよは更けにけり  
季尚
- 依花待春  
春は明日立ちなん花をとばかりに老いもわすれてくるゝ年かな  
淇園
- 歳暮  
うつしみるかゞみのかげのしら雪もつもればつもる年のくれかな  
長秋
- いたづらに向かふ硯の海辺より老いの波よる年の暮れかな  
有信  
「(七二才)」
- 朝な／＼むかふ鏡の霜ぐもりはるを待つまで年ぞ積もれる  
清彦
- 我がかどのいさをも見えていたづらに去年も暮れにしけふにやはあ  
らぬ  
信英
- 春を待つころばかりはうなる子のむかしながらの年のくれかな  
茂之
- ながれ行くとしの行くへはしら川の波のしわにぞ跡をみせける  
浄阿
- 小車の音かしましき行きかひにめぐる月日の果ても見えけり  
季尚
- 在明の今は月の影ばかり残るとしとも成りにけるかな  
永寛

- 1492 わが身世につらぬきあへぬ玉のをのはし短くも残る年かな 宏年
- 1493 世の塵をはらひ果てたるわが身にもつもればつもる年のくれ哉 仲子
- 1494 身につもる年のなげきはおもほえてたゞ花鳥の春ぞ待たるゝ 千代女
- 1495 歳暮川  
花をのみ待たるゝ春もあすか川あはれかへらぬ水の音かな 芳蔭
- 1496 歳暮水  
岩そゝぐ山下水もこほる也いづこにとしはながれ行くらん 将貫  
「(七三才)」
- 1497 市歳暮  
ゆづる葉のゆづりもしらぬ市人のあらそふはしにくるゝとしかな 茂之
- 1498 市人も松をはらひて来ん年の子日おぼゆる年の暮れかな 貞宣  
閑居歳暮
- 1499 世に有りていそがんなの富にこそ春をもまため年もをしまめ 治堅  
山家歳暮
- 1500 行くとしはさのみしたはし山ざくらははれん春を待つ宿にして 言幸
- 1501 ゆく年をゝしむ心の奥のみはなれすむ山もしらずや有らん 武彦  
歳暮夢
- 1502 ね覚めて思ひかへせばひとゝせも見果てぬ夢のこゝち也けり 吟子
- 1503 歳暮述懐  
今更に思ひしらるゝおこたりを夢ともなさでくるゝ年かな 周道  
しはすばかり山里にもものして
- 1504 いはゞしる雪げの水に年浪もながれ果てたる心地こそすれ 年のくれに団居して
- 1505 行くとしをゝしむこよひの言のはも花咲く春をかついそぐらん 西谷親文  
「(七三才)」
- 1506 としのくれ江戸に在りて  
くれて行く年のをだ巻くりかへしかへる春こそ待ちにまたるれ 安歎
- 1507 いつしかとくるゝ思へばむさし野も年の行き来はほどなかりけり 惟成
- 1508 おなじ頃あるね覚めに  
あら玉のとしのいくとせ杉まくら過ぎし月かは夢かと思ふ  
七十に成りける年のくれ、女子どもの何くれとこといそぐをきゝて  
かしましき春のまうけはことやめよいざ花鳥の物がたりせん 淇園
- 1509 十二月晦日の夜更に孫女どもの目覚めて春になりつやなどいひけるほど、窓の竹の雪ながらしらみたるに 季甫  
ふりにける年のなごりもくれ竹の窓より春をみ初めつるかな  
「(七四才)」
- 1510 思ふ事ありけるとしのくれに 祐之
- 1511 なすわざもなくて身にそふ年の暮れをしむ心もやさしかりけり  
年内立春
- 1512 行くとしの末野の原の薄霞たつとはみえて春としもなし 永寛
- 1513 年波も氷りはてゝや車川めぐりも果てず春は立つらん 豊広
- 1514 ゆく年の日数かぞへて折るゆびのふしあへぬまに來たる春哉

追儼

ちせ子

1515 宿よことになやらふ声や世の人の心のおにの静め成るらん 有信

除夜

1516 なごりなく春のまうけもなし終へて明くる待つまの夢ぞのどけき

治堅

1517 立ちはしる道のちまたの人声の静まるかたに年は行くらん 宣甫

1518 手枕の夢をことしの余浪(なみり)にて春待つほどの夜は更けにけり 宏年

「(七四ウ)

【翻刻付記】

1237 歌 第三句「紅葉を」「紅葉を」の誤りか。以下、1286 歌・1389 歌の「紅葉」も「紅葉」の誤りと思われる。

1243 歌 第二句「をだの僧都の」「僧都」は「そほづ」の宛字で案山子をさす。

1245 歌 第五句「打ちしぐれつ」「打ちしぐれつ」の誤りか。

\* 原稿受理 令和六年三月八日

\*\* 教養教育部門